富山県立伏木高等学校　学校長だより　ＶＯＬ．１　R5.4

交流の地・ふしきから世界を見つめよう！

R5.4.1　今年は早い満開でした

みなさん、こんにちは。校長の高野です。
これから月１回、伏木の歴史や文化を紹介します。

現在、伏木高校のある高岡市伏木は、奈良・平安時代の昔から国際交流がとても盛んな地でした。外からの文化を受け入れる風土が育まれ、不思議とアットホームな雰囲気があります。今回はあまり知られていない、渤海国との国際交流についてお話ししましょう。

◆渤海（ぼっかい）との交流

奈良時代の 713 年にそれまでの「震」という国が「渤海」という国になります。この国は最盛期には中国東北地方を中心に、朝鮮半島北部やロシア沿海地方にまで勢力が及んでいました。「海東の盛国」といわれるほど繁栄していましたが、926 年に隣国の契丹（きったん）に滅ぼされました。

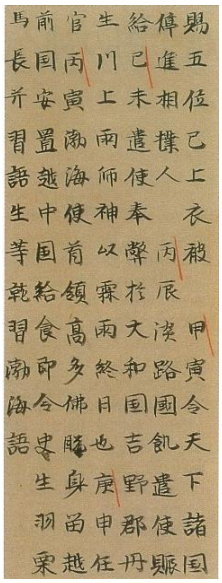
渤海からの使節を「渤海使」とよびます。渤海使は 34 回やってきて、日本に毛皮類や人参、蜂蜜などをもたらしました。モンゴルの犬もつれてきました。現在のウラジオストクから船を出し、冬の強い北西の季節風を利用して日本海沿岸へ来ました。日本からも 13 回の使節が渤海へ派遣されています。

『日本海読本』（2004）より引用

◆越中国府（現在の伏木）で渤海語を学ぶ

『日本紀略』という日本の歴史書に越中の記事が出てきます。大同４年（809 年）に来日した渤海使のなかに高多仏（こうたぶつ）という首領（地方の首長）がいました。彼ははじめ越前（現在の福井県）にとどまっていましたが、越中の国府に移り、史生（ししょう・書記官）や習語生に渤海語を学ばせています。当時、渤海語の通訳ができる人を越中国府のある伏木の地で育成していたという、貴重な記録です。

伏木の地で外国語を学ぶことは、最近はじめられたことではなく、平安時代から長い時をへて、今日まで脈々と受け継がれているのですね！



『日本紀略』（内閣文庫蔵）